

原因分析がすべて終了した出生年別統計

原因分析がすべて終了した 2009 年出生児の概況

2018 年 3 月 29 日時点

本集計の対象事例は、本制度の補償対象となった脳性麻痺事例のうち、原因分析がすべて終了した 2009 年出生児の事例 419 件である。

注) 表に記載している割合は、計算過程において四捨五入しているため、その合計が 100.0%にならない場合がある。

I. 事例の内容

1. 分娩の状況

表 I - 1 曜日別件数

曜日	件数	%	左記のうち休日 ^{注)}
月曜日	63	15.0	8
火曜日	85	20.3	7
水曜日	46	11.0	3
木曜日	53	12.6	0
金曜日	57	13.6	3
土曜日	71	16.9	3
日曜日	44	10.5	44
合計	419	100.0	68

注) 「休日」とは、日曜・祝日および1月1日～1月3日、12月29日～12月31日のことである。

表 I - 2 出生時間別件数

時間帯	件数	%
0～1 時台	26	6.2
2～3 時台	26	6.2
4～5 時台	23	5.5
6～7 時台	19	4.5
8～9 時台	33	7.9
10～11 時台	42	10.0
12～13 時台	57	13.6
14～15 時台	52	12.4
16～17 時台	57	13.6
18～19 時台	34	8.1
20～21 時台	24	5.7
22～23 時台	26	6.2
合計	419	100.0

表 I - 3 分娩週数別件数

分娩週数 ^{注)}	件数	%
満 28 週	12	2.9
満 29 週	2	0.5
満 30 週	8	1.9
満 31 週	5	1.2
満 32 週	7	1.7
満 33 週	15	3.6
満 34 週	16	3.8
満 35 週	25	6.0
満 36 週	33	7.9
満 37 週	47	11.2
満 38 週	64	15.3
満 39 週	81	19.3
満 40 週	63	15.0
満 41 週	36	8.6
満 42 週	5	1.2
合計	419	100.0

注) 「分娩週数」は、妊娠満 37 週以降満 42 週未満の分娩が正期産である。

表 I - 4 分娩機関区分別件数

分娩機関区分別件数	件数	%
病院	283	67.5
診療所	132	31.5
助産所	4	1.0
合計	419	100.0

表 I - 5 地域別件数

地域 ^{注)}	件数
北海道	13
東北	24
南関東	105
北関東・甲信	28
北陸	16
東海	66
近畿	71
中国	23
四国	18
九州	55
合計	419

注) 「地域」は、分娩機関所在地を指す。総務省統計局ホームページの「地域区分」を参考に分類した。

2. 妊産婦等に関する基本情報

表 I - 6 出産時における妊産婦の年齢

年齢	件数	%
20歳未満	4	1.0
20～24歳	40	9.5
25～29歳	115	27.4
30～34歳	141	33.7
35～39歳	98	23.4
40歳以上	21	5.0
合計	419	100.0

表 I - 7 妊産婦の身長

身長	件数	%
150cm未満	27	6.4
150cm以上～155cm未満	100	23.9
155cm以上～160cm未満	144	34.4
160cm以上～165cm未満	98	23.4
165cm以上～170cm未満	34	8.1
170cm以上	7	1.7
不明	9	2.1
合計	419	100.0

表 I - 8 非妊娠時・分娩時別妊産婦の体重

体重	非妊娠時		分娩時	
	件数	%	件数	%
40kg 未満	5	1.2	0	0.0
40kg 以上～50kg 未満	164	39.1	19	4.5
50kg 以上～60kg 未満	153	36.5	166	39.6
60kg 以上～70kg 未満	50	11.9	148	35.3
70kg 以上～80kg 未満	14	3.3	63	15.0
80kg 以上～90kg 未満	6	1.4	15	3.6
90kg 以上	3	0.7	5	1.2
不明	24	5.7	3	0.7
合計	419	100.0	419	100.0

表 I - 9 非妊娠時における妊産婦のBMI

BMI ^{注)}		件数	%
やせ	18.5 未満	71	16.9
正常	18.5 以上～25.0 未満	268	64.0
肥満Ⅰ度	25.0 以上～30.0 未満	37	8.8
肥満Ⅱ度	30.0 以上～35.0 未満	10	2.4
肥満Ⅲ度以上	35.0 以上	5	1.2
不明		28	6.7
合計		419	100.0

注) 「BMI (Body Mass Index: 肥満指数)」は、「体重 (kg)」÷「身長 (m) ²」で算出される値である。

表 I - 10 妊娠中の体重の増減

体重の増減 ^{注)}	件数	%
± 0 kg 未満	5	1.2
± 0 kg ~ + 7 kg 未満	87	20.8
+ 7 kg ~ + 12 kg 未満	188	44.9
+ 12 kg ~ + 20 kg 未満	107	25.5
+ 20 kg 以上	5	1.2
不明	27	6.4
合計	419	100.0

注) 「体格区分別 妊娠全期間を通しての推奨体重増加量」では、低体重(やせ: BMI18.5 未満)の場合 9~12kg、ふつう(BMI18.5 以上 25.0 未満)の場合 7~12kg、肥満(BMI25.0 以上)の場合個別対応(BMIが25.0をやや超える程度の場合は、およそ5kgを目安とし、著しく超える場合には、他のリスク等を考慮しながら、臨床的な状況を踏まえ、個別に対応していく)とされている。(厚生労働省 妊産婦のための食生活指針 平成18年2月)

表 I - 11 妊産婦の飲酒および喫煙の有無

有無	飲酒・喫煙の別	飲酒		喫煙	
		件数	%	件数	%
あり		53	12.6	53	12.6
	非妊娠時のみ	49	(11.7)	38	(9.1)
	妊娠時	4	(1.0)	15	(3.6)
なし		264	63.0	296	70.6
不明 ^{注)}		102	24.3	70	16.7
	合計	419	100.0	419	100.0

注) 「不明」は、飲酒および喫煙の有無や時期が不明のものである。

表 I - 12 妊産婦の既往

妊産婦の既往 ^{注1)}		件数	%
既往あり		186	44.4
【重複あり】	婦人科疾患	48	11.5
	子宮筋腫	12	(2.9)
	子宮内膜症	5	(1.2)
	卵巣嚢腫	11	(2.6)
	その他の婦人科疾患	24	(5.7)
	呼吸器疾患	55	13.1
	喘息	40	(9.5)
	肺炎・気管支炎	9	(2.1)
	結核	4	(1.0)
	その他の呼吸器疾患	5	(1.2)
	精神疾患	9	2.1
	心疾患	8	1.9
	甲状腺疾患	4	1.0
	自己免疫疾患	4	1.0
	高血圧	2	0.5
	脳血管疾患	2	0.5
	上記の疾患なし ^{注2)}	74	17.7
	既往なし		224
不明		9	2.1
合計		419	100.0

注1) 「妊産婦の既往」は、妊娠時に完治している疾患および慢性的な疾患の両方を含む。

注2) 「上記の疾患なし」は、原因分析報告書に記載されている疾患のうち、項目として挙げた疾患以外を集計しており、消化器疾患、腎・泌尿器疾患等を含む。

表 I - 13 既往分娩回数

回数	件数	%
0回	229	54.7
1回	125	29.8
2回	53	12.6
3回	7	1.7
4回	3	0.7
5回以上	2	0.5
合計	419	100.0

表 I - 14 経産婦における既往帝王切開術の回数

回数	件数	%
0回	151	79.5
1回	33	17.4
2回以上	3	1.6
不明	3	1.6
合計	190	100.0

3. 妊娠経過

表 I - 15 不妊治療の有無

不妊治療	件数	%
あり ^{注1)}	46	11.0
体外受精	23	(5.5)
人工授精	6	(1.4)
人工授精・体外受精以外 ^{注2)}	16	(3.8)
不明	1	(0.2)
なし	345	82.3
不明	28	6.7
合計	419	100.0

注1) 「あり」は、原因分析報告書において、今回の妊娠が不妊治療によるものであると記載された件数である。

注2) 「人工授精・体外受精以外」は、排卵誘発剤投与、hMG 投与等である。

表 I - 16 妊婦健診受診状況

受診状況 ^{注)}	件数	%
定期的を受診	377	90.0
受診回数不足・未受診	22	5.3
不明	20	4.8
合計	419	100.0

注) 妊婦健診の実施時期については、妊娠初期から妊娠 23 週(第 6 月末)までは 4 週間に 1 回、妊娠 24 週(第 7 月)から妊娠 35 週(第 9 月末)までは 2 週間に 1 回、妊娠 36 週(第 10 月)以降分娩までは 1 週間に 1 回、が望ましいとされている。(母性、乳幼児に対する健康診査及び保健指導の実施について(平成 8 年 11 月 20 日児発第 934 号厚生省児童家庭局長通知))

表 I -17 胎児数

胎児数 ^{注)}	件数	%
単胎	390	93.1
多胎	29	6.9
合計	419	100.0

注) 「多胎」は、1胎児1事例としている。

表 I -18 胎盤位置

胎盤位置	件数	%
正常	393	93.8
前置胎盤	5	1.2
低置胎盤	4	1.0
不明	17	4.1
合計	419	100.0

表 I -19 羊水量異常

羊水量異常	件数	%
羊水過多	13	3.1
羊水過少	15	3.6
上記の診断名なし ^{注)}	391	93.3
合計	419	100.0

注) 「上記の診断名なし」は、原因分析報告書に「羊水過多」「羊水過少」の診断名がなく、「異常なし」や「不明」を含む。

表 I - 20 産科合併症

産科合併症	件数	%
産科合併症あり ^{注1)}	323	77.1
【重複あり】	切迫早産 ^{注2)}	177 (42.2)
	常位胎盤早期剥離	84 (20.0)
	子宮内感染	54 (12.9)
	切迫流産	44 (10.5)
	妊娠高血圧症候群	36 (8.6)
	妊娠糖尿病	10 (2.4)
	臍帯脱出	12 (2.9)
	子宮破裂	6 (1.4)
	頸管無力症	5 (1.2)
	上記の疾患なし ^{注3)}	32 (7.6)
産科合併症なし	94	22.4
不明	2	0.5
合計	419	100.0

注1) 「産科合併症あり」は、確定診断されたもののみを集計している。

注2) 「切迫早産」は、リトドリン塩酸塩が処方されたものを含む。

注3) 「上記の疾患なし」は、原因分析報告書に記載されている疾患のうち、項目として挙げた疾患以外を集計しており、子宮筋腫や回旋異常等を含む。

4. 分娩経過

表 I - 21 分娩中の母体搬送件数

母体搬送件数	件数	%
母体搬送あり	40	9.5
病院から病院へ母体搬送	8	(1.9)
診療所から病院へ母体搬送	31	(7.4)
上記以外の母体搬送	1	(0.2)
母体搬送なし	379	90.5
合計	419	100.0

表 I - 22 児娩出経路

児娩出経路 ^{注)}	件数	%
経膈分娩	205	48.9
吸引・鉗子いずれも実施なし	158	(37.7)
吸引分娩	42	(10.0)
鉗子分娩	5	(1.2)
帝王切開術	214	51.1
予定帝王切開術	29	(6.9)
緊急帝王切開術	185	(44.2)
合計	419	100.0

注) 「児娩出経路」は、最終的な娩出経路のことである。

表 I - 23 娩出経路別児娩出時の胎位

胎位 \ 娩出経路	経膈分娩		帝王切開術	
	件数	%	件数	%
頭位	201	98.0	183	85.5
骨盤位	4	2.0	22	10.3
横位	0	0.0	3	1.4
不明	0	0.0	6	2.8
合計	205	100.0	214	100.0

表 I - 24 和痛・無痛分娩の実施の有無

和痛・無痛分娩	件数	%
実施あり	22	5.3
実施なし	397	94.7
合計	419	100.0

表 I - 25 経膈分娩事例における初産・経産別分娩所要時間

所要時間 ^{注2)}	分娩期間		分娩所要時間 ^{注1)}			
			初産		経産	
	件数	%	件数	%		
5時間未満	23	19.8	41	46.1		
5時間以上～10時間未満	25	21.6	28	31.5		
10時間以上～15時間未満	28	24.1	12	13.5		
15時間以上～20時間未満	17	14.7	4	4.5		
20時間以上～25時間未満	15	12.9	0	0.0		
25時間以上～30時間未満	2	1.7	0	0.0		
30時間以上	5	4.3	0	0.0		
不明	1	0.9	4	4.5		
合計	116	100.0	89	100.0		

注1) 「分娩所要時間」は、陣痛開始から胎盤娩出までの時間である。

注2) 陣痛開始から、初産婦では30時間、経産婦では15時間を経過しても児娩出に至らない場合、遷延分娩とされている。

表 I - 26 経膈分娩事例における初産・経産別分娩所要時間（分娩第1期）

所要時間	分娩期間		分娩第1期 ^{注)}			
			初産		経産	
	件数	%	件数	%		
5時間未満	29	25.0	43	48.3		
5時間以上～10時間未満	26	22.4	25	28.1		
10時間以上～15時間未満	26	22.4	5	5.6		
15時間以上～20時間未満	15	12.9	3	3.4		
20時間以上～25時間未満	10	8.6	0	0.0		
25時間以上～30時間未満	2	1.7	0	0.0		
30時間以上	5	4.3	0	0.0		
不明	3	2.6	13	14.6		
合計	116	100.0	89	100.0		

注) 「分娩第1期」は、陣痛開始から子宮口が完全に開く(子宮口全開大)までの時間である。

表 I-27 経膈分娩事例における初産・経産別分娩所要時間（分娩第2期）

所要時間	分娩期間	分娩第2期 ^{注1)}			
		初産		経産	
		件数	%	件数	%
2時間未満		96	82.8	71	79.8
2時間以上 ^{注2)}		17	14.7	7	7.9
不明		3	2.6	11	12.4
合計		116	100.0	89	100.0

注1) 「分娩第2期」は、子宮口が完全に開いてから、児が娩出するまでの時間である。

注2) 子宮口がほぼ全開大になって以降それまで同様の陣痛が続いているにもかかわらず、2時間以上にわたって分娩の進行が認められない場合、分娩停止とされている。

表 I-28 全事例における初産・経産別破水から児娩出までの所要時間

所要時間	分娩期間	破水から児娩出まで			
		初産		経産	
		件数	%	件数	%
24時間未満		121	52.8	96	50.5
24時間以上		27	11.8	5	2.6
帝王切開術実施まで破水なし		71	31.0	74	38.9
不明		10	4.4	15	7.9
合計		229	100.0	190	100.0

表 I-29 子宮破裂の有無および子宮手術の既往の有無

子宮破裂の有無および子宮手術の既往の有無		件数	%
子宮破裂あり ^{注)}		6	1.4
子宮手術の 既往の有無	既往なし	3	(0.7)
	帝王切開術の既往あり	3	(0.7)
子宮破裂なし		413	98.6
合計		419	100.0

注) 「子宮破裂あり」は、不全子宮破裂を含む。

表 I - 30 臍帯脱出の有無および関連因子

臍帯脱出の有無および関連因子		件数	%
臍帯脱出あり		12	2.9
【重複あり】 関連因子	経産婦	9	(2.1)
	子宮収縮薬 ^{注1)} 投与	5	(1.2)
	メトロイリーゼ法 ^{注2)}	5	(1.2)
	人工破膜	4	(1.0)
	骨盤位	1	(0.2)
	横位	0	(0.0)
	羊水過多	0	(0.0)
臍帯脱出なし		406	96.9
不明		1	0.2
合計		419	100.0

注1) 「子宮収縮薬」は、オキントシン、PGF_{2α}（プロスタグランジンF_{2α}）、PGE₂（プロスタグランジンE₂）である。

注2) 「メトロイリーゼ法」は、陣痛誘発と子宮口の開大を促す方法の一つである。ゴムでできた風船のようなものを膨らませない状態で子宮口に入れ、その後滅菌水を注入して膨らませ、それによって子宮口を刺激して開大を促進する。

表 I - 31 分娩誘発・促進の処置の有無

有無	処置	分娩誘発 ^{注)}		分娩促進 ^{注)}	
		件数	%	件数	%
あり		75	17.9	135	32.2
なし		344	82.1	281	67.1
不明		0	0.0	3	0.7
合計		419	100.0	419	100.0

注) 「分娩誘発」は、陣痛開始前に行ったものであり、「分娩促進」は、陣痛開始後に行ったものである。

表 I - 32 分娩誘発・促進の処置の方法

分娩誘発・促進の処置 ^{注1)} の方法		件数	%	
分娩誘発・促進あり		172	41.1	
【重複あり】 処置の方法	投与 薬剤の	オキシトシンの投与	94 (22.4)	
		PGF _{2α} の投与	11 (2.6)	
		PGE ₂ の投与	28 (6.7)	
	人工破膜		105	(25.1)
	メトロイリーゼ法 ^{注2)}		33	(7.9)
	子宮頸管拡張器 ^{注3)}		8	(1.9)
	その他		24	(5.7)
分娩誘発・促進なし		246	58.7	
不明		1	0.2	
合計		419	100.0	

注1) 「分娩誘発・促進の処置」は、吸湿性子宮頸管拡張器の挿入、メトロイリーゼ法、人工破膜、子宮収縮薬の投与を行ったものである。

注2) 「メトロイリーゼ法」は、陣痛誘発と子宮口の開大を促す方法の一つである。ゴムでできた風船のようなものを膨らまさない状態で子宮口に入れ、その後滅菌水を注入して膨らませ、それによって子宮口を刺激して開大を促進する。

注3) 「子宮頸管拡張器」は、陣痛誘発と子宮口の開大を促すために使用するもので、ラミナリア桿、ラミセル、ダイラパンS等がある。なお、メトロイリーゼ法実施時に挿入したものを除く。

表 I - 33 人工破膜実施時の子宮口の状態

子宮口の状態 ^{注1)}	件数	%
0 cm以上～3 cm未満	1	1.0
3 cm以上～7 cm未満	13	12.4
7 cm以上～10 cm未満 ^{注2)}	19	18.1
全開大	52	49.5
不明	20	19.0
合計	105	100.0

注1) 「子宮口の状態」は、「子宮口開大度○cm～○cm」等と記載されているものは、開大度が小さい方の値とした。

注2) 「7 cm以上～10 cm未満」は、「ほぼ全開大」、「全開近く」を含む。

表 I-34 人工破膜実施時の胎児先進部の高さ

胎児先進部の高さ ^{注)}	件数	%
～-3	2	1.9
-2	7	6.7
-1	9	8.6
±0	6	5.7
+1	5	4.8
+2	0	0.0
+3	3	2.9
+4～	4	3.8
不明	69	65.7
合計	105	100.0

注) 「胎児先進部の高さ」は、「胎児先進部〇～〇」等と記載されているものは、先進部の位置が高い方の値とした。

表 I-35 急速遂娩の有無および適応

急速遂娩 ^{注1)} の有無および適応		件数	%
あり		232	55.4
【重複あり】 適応	胎児機能不全	184	(43.9)
	分娩遷延・停止	33	(7.9)
	その他 ^{注2)}	57	(13.6)
	不明	5	(1.2)
なし		186	44.4
不明		1	0.2
合計		419	100.0

注1) 「急速遂娩」は、吸引分娩、鉗子分娩、緊急帝王切開術を実施したものである。

注2) 「その他」は、胎位異常、前置胎盤からの出血等である。

表 I - 36 急速遂娩^{注1)} 決定から児娩出までの時間

娩出方法 所要時間	吸引分娩	鉗子分娩	帝王切 開術	吸引分娩 →鉗子分娩	吸引分娩 →帝王切開術	その他	合計	%
30分未満	12	1	33	0	0	0	46	19.8
30分以上 60分未満	5	1	54	0	5	0	65	28.0
60分以上	1	0	51	0	6	0	58	25.0
不明 ^{注2)}	24	2	32	1	3	1	63	27.2
合計	42	4	170	1	14	1	232	100.0

注1) 「急速遂娩」は、吸引分娩、鉗子分娩、緊急帝王切開術を実施したものである。

注2) 「不明」は、急速遂娩の決定時刻が不明なものである。

表 I - 37 子宮底圧迫法(クリステレル胎児圧出法)の実施の有無

子宮底圧迫法 ^{注)} の実施	件数	%
あり	60	14.3
なし	358	85.4
不明	1	0.2
合計	419	100.0

注) 「子宮底圧迫法」は、原因分析報告書において、「子宮底圧迫法を実施した」と記載されているものである。

表 I - 38 緊急帝王切開術決定から児娩出までの時間

所要時間	件数	%
30分未満	38	20.5
30分以上～60分未満	58	31.4
60分以上	55	29.7
不明 ^{注)}	34	18.4
合計	185	100.0

注) 「不明」は、緊急帝王切開術の決定時刻が不明なものである。

表 I - 39 吸引分娩の回数

吸引分娩の回数	吸引分娩	
	件数	%
実施あり	58	13.8
5回以内	47	(11.2)
6回以上	3	(0.7)
回数不明	8	(1.9)
実施なし	361	86.2
合計	419	100.0

表 I - 40 鉗子分娩の回数

鉗子分娩の回数	鉗子分娩	
	件数	%
実施あり	6	1.4
1回	4	(1.0)
2回以上	1	(0.2)
回数不明	1	(0.2)
実施なし	412	98.3
不明	1	0.2
合計	419	100.0

表 I - 41 胎児心拍数異常の有無

胎児心拍数異常	件数	%
あり ^{注1)}	343	81.9
なし	67	16.0
不明 ^{注2)}	9	2.1
合計	419	100.0

注1) 「あり」は、原因分析報告書において、基線細変動減少または消失、一過性頻脈の消失、徐脈の出現等の胎児心拍数異常について記載されているものである。

注2) 「不明」は、胎児心拍数聴取がない事例2件を含む。

表 I - 42 分娩中の胎児心拍数聴取方法

胎児心拍数聴取方法	件数	%
あり	416	99.3
ドプラのみ	18	(4.3)
分娩監視装置のみ	178	(42.5)
両方	220	(52.5)
なし	2	0.5
不明	1	0.2
合計	419	100.0

表 I - 43 臍帯巻絡の有無およびその回数

臍帯巻絡の有無およびその回数	件数	%
臍帯巻絡あり	110	26.3
1回	82	(19.6)
2回	15	(3.6)
3回以上	8	(1.9)
回数不明	5	(1.2)
臍帯巻絡なし	291	69.5
不明	18	4.3
合計	419	100.0

表 I - 44 臍帯の長さ

臍帯の長さ	件数	%
30 c m未満	11	2.6
30 c m以上～40 c m未満	52	12.4
40 c m以上～50 c m未満	108	25.8
50 c m以上～60 c m未満	102	24.3
60 c m以上～70 c m未満	69	16.5
70 c m以上～80 c m未満	23	5.5
80 c m以上	17	4.1
不明	37	8.8
合計	419	100.0

表 I - 45 臍帯異常

臍帯異常		件数	%
臍帯異常あり		126	30.1
【重複あり】	辺縁付着	46	(11.0)
	卵膜付着 (前置血管を含む)	9	(2.1)
	過長臍帯 (70cm 以上)	40	(9.5)
	過短臍帯 (25cm 以下)	7	(1.7)
	捻転の異常	15	(3.6)
	単一臍帯動脈	3	(0.7)
	真結節	2	(0.5)
臍帯異常なし		196	46.8
不明		97	23.2
合計		419	100.0

5. 新生児期の経過

表 I - 46 出生体重

出生体重 ^{注1)}	件数	%
1,000g 未満	4	1.0
1,000g 以上～1,500g 未満	26	6.2
1,500g 以上～2,000g 未満	26	6.2
2,000g 以上～2,500g 未満	94	22.4
2,500g 以上～3,000g 未満	142	33.9
3,000g 以上～3,500g 未満	96	22.9
3,500g 以上～4,000g 未満	25	6.0
4,000g 以上	5	1.2
不明 ^{注2)}	1	0.2
合計	419	100.0

注1) 体重の最小値は752gであった。

注2) 「不明」は、蘇生処置等を優先したため、出生時に体重を計測できなかった事例である。

表 I - 47 出生時の発育状態

出生時在胎週数 出生時の発育状態 ^{注1)}	28～32週	33～36週	37～41週	42週～	合計	%
Light for dates (LFD) ^{注2)}	7	18	58	0	83	19.8
Appropriate for dates (AFD)	21	59	215	0	295	70.4
Heavy for dates (HFD) ^{注3)}	6	12	17	0	35	8.4
不明 ^{注4)}	0	0	1	5	6	1.4
合計	34	89	291	5	419	100.0

注1) 「出生時の発育状態」は、「在胎週数別出生時体重基準値 (1998年)」に基づいている。

注2) 「Light for dates (LFD)」は、在胎週数別出生時体重基準値の10パーセント未満の児を示す。

注3) 「Heavy for dates (HFD)」は、在胎週数別出生時体重基準値の90パーセントを超える児を示す。

注4) 「不明」は、出生体重が不明の事例、および「在胎週数別出生時体重基準値」の判定対象外である妊娠42週以降に出生した事例である。

表 I - 48 新生児の性別

性別	件数	%
男児	225	53.7
女児	194	46.3
合計	419	100.0

表 I - 49 アプガースコア

時間 アプガースコア ^{注1、2)}	1分後		5分後		10分後	
	件数	%	件数	%	件数	%
0点	47	11.2	19	4.5	0	0.0
1点	74	17.7	32	7.6	0	0.0
2点	40	9.5	30	7.2	2	0.5
3点	40	9.5	26	6.2	4	1.0
4点	28	6.7	32	7.6	5	1.2
5点	19	4.5	29	6.9	3	0.7
6点	22	5.3	44	10.5	5	1.2
7点	16	3.8	32	7.6	5	1.2
8点	56	13.4	29	6.9	3	0.7
9点	59	14.1	79	18.9	3	0.7
10点	15	3.6	49	11.7	8	1.9
不明	3	0.7	18	4.3	381	90.9
合計	419	100.0	419	100.0	419	100.0

注1) 「アプガースコア」は、分娩直後の新生児の状態を①心拍数、②呼吸、③筋緊張、④反射、⑤皮膚色の5項目で評価する。

注2) 「アプガースコア」は、「〇点～〇点」等と記載されているものは、点数が低い方の値とした。

表 I -50 臍帯動脈血ガス分析値の pH

臍帯動脈血ガス分析値の pH	件数	%
実施あり	278	66.3
7.2 以上	133	(31.7)
7.1 以上～7.2 未満	35	(8.4)
7.0 以上～7.1 未満	30	(7.2)
6.9 以上～7.0 未満	16	(3.8)
6.8 以上～6.9 未満	17	(4.1)
6.7 以上～6.8 未満	15	(3.6)
6.7 未満	24	(5.7)
疑義 ^{注1)}	7	(1.7)
不明 ^{注2)}	1	(0.2)
実施なし ^{注3)}	141	33.7
合計	419	100.0

注1) 「疑義」は、原因分析報告書において、「臍帯動脈血ガス分析値は、検査値として通常考えにくい値」等の記載があった事例である。

注2) 「不明」は、臍帯動脈血ガス分析値で pH が不明なものである。

注3) 「実施なし」は、採取時期が不明なもの、臍帯動脈血か臍帯静脈血かが不明なものを含む。

表 I -51 新生児蘇生処置の実施の有無

実施した新生児蘇生処置 ^{注1)}	件数	%
実施あり	260	62.1
【重複あり】人工呼吸 ^{注2)}	247	(58.9)
気管挿管	200	(47.7)
胸骨圧迫	82	(19.6)
アドレナリン投与	55	(13.1)
上記のいずれも実施なし ^{注3)}	159	37.9
合計	419	100.0

注1) 「実施した新生児蘇生処置」は、原因分析報告書 2015 年公表事例までは、「生後 30 分以内」に実施した蘇生法を集計している。原因分析報告書 2016 年公表事例以降では「生後 28 日未満」に実施した蘇生法を集計している。

注2) 「人工呼吸」は、バッグ・マスク、チューブ・バッグ、マウス・ツーン・マウス、人工呼吸器の装着、具体的方法の記載はないが人工呼吸を実施したと記載のあるものである。

注3) 「上記のいずれも実施なし」は、出生時には蘇生を必要とする状態ではなかった事例や、「生後 30 分より後」または「生後 28 日以降」に蘇生処置を行った事例等である。

表 I - 52 新生児搬送の有無

新生児搬送	件数	%
あり ^{注1)}	203	48.4
なし ^{注2)}	216	51.6
合計	419	100.0

注1) 「あり」は、生後28日未満に他の医療機関に新生児搬送された事例の件数を示す。

注2) 「なし」の216件のうち、153件は自施設のNICU等において治療を行っている。

表 I - 53 新生児期の診断名

新生児期の診断名 ^{注1)}		件数	%
新生児期の診断名あり		324	77.3
【重複あり】	低酸素性虚血性脳症	158	(37.7)
	頭蓋内出血	68	(16.2)
	呼吸窮迫症候群	44	(10.5)
	動脈管開存症	41	(9.8)
	播種性血管内凝固症候群(DIC)	32	(7.6)
	低血糖	31	(7.4)
	新生児遷延性肺高血圧症	27	(6.4)
	胎便吸引症候群	26	(6.2)
	新生児一過性多呼吸	19	(4.5)
	多嚢胞性脳軟化症	15	(3.6)
	脳室周囲白質軟化症	14	(3.3)
	高カリウム血症	13	(3.1)
	帽状腱膜下血腫	10	(2.4)
	新生児貧血	8	(1.9)
	GBS感染症	3	(0.7)
脳梗塞	2	(0.5)	
上記の診断名なし ^{注2)}	39	(9.3)	
新生児期の診断名なし		95	22.7
合計		419	100.0

注1) 「新生児期の診断名」は、診療録に記載のあるもの、または原因分析の段階で判断され原因分析報告書に記載されているもののうち、生後28日未満に診断されたものである。

注2) 「上記の診断名なし」は、原因分析報告書に記載されている診断名のうち、項目として挙げた診断名以外を集計しており、高ビリルビン血症や頭血腫等を含む。

Ⅱ. 診療体制

表Ⅱ－１ 病院における診療体制

対象数＝283

診療体制		件数
救急医療機関	あり	238
	初期	6
	二次	128
	三次	104
	なし	38
	不明	7
	合計	283
周産期指定	あり	146
	総合周産期母子医療センター	57
	地域周産期母子医療センター	89
	なし	137
	合計	283

表Ⅱ－２ 病院および診療所における院内助産（所）の有無

対象数＝415

院内助産（所）の有無	あり	なし	不明	合計
病院	54	227	2	283
診療所	5	126	1	132
合計	59	353	3	415

表Ⅱ－３ 診療所および助産所における産科オープンシステム登録の有無

対象数＝136

産科オープンシステム ^{注1)} 登録の有無 ^{注2)}	あり	なし	不明	合計
診療所	14	115	3	132
助産所	1	3	0	4
合計	15	118	3	136

注1)「産科オープンシステム」は、妊婦健診は診療所で行い、分娩は診療所の医師自身が連携病院に赴いて行うシステムのことであり、産科セミオープンシステムとは、妊婦健診をたとえば9ヶ月位まで診療所で診療所の医師が行い、その後は提携病院へ患者を送るシステムのことである。(平成16年度 厚生労働科学研究費補助金 健康安全確保総合研究分野医療技術評価総合研究「産科領域における安全対策に関する研究(主任研究者:中林正雄)」)

注2)「産科オープンシステム登録の有無」は、産科セミオープンシステムを含む。

表Ⅱ－４ 分娩機関の病棟

対象数＝415

病棟	病院	診療所	合計
産科単科病棟	87	49	136
産婦人科病棟	120	81	201
他診療科との混合病棟	76	0	76
不明	0	2	2
合計	283	132	415

表Ⅱ－５ 年間分娩件数

分娩機関区分 年間分娩件数	病院	診療所	助産所	合計
200 件未満	13	17	3	33
200 件以上～400 件未満	52	40	1	93
400 件以上～600 件未満	73	34	0	107
600 件以上～800 件未満	49	24	0	73
800 件以上～1000 件未満	34	10	0	44
1000 件以上～2000 件未満	50	7	0	57
2000 件以上	11	0	0	11
不明	1	0	0	1
合計	283	132	4	419

表Ⅱ－6 事例に関わった医療従事者の経験年数

対象数=419

職種 経験年数	産婦人科医 (人)	小児科医 (人)	麻酔科医 (人)	助産師 (人)	看護師 (人)	准看護師 (人)
1年未満	4	0	2	18	2	2
1年	19	7	4	55	10	7
2年	28	10	9	63	15	6
3年	39	22	9	66	27	6
4年	50	27	10	55	26	2
5年	23	24	11	64	25	4
6年	26	26	6	40	17	5
7年	40	14	7	28	24	8
8年	15	15	2	34	25	6
9年	18	11	2	26	8	5
10年	35	21	5	48	27	10
11～15年	123	43	34	133	68	40
16～20年	107	32	17	104	56	21
21～25年	127	24	16	93	39	28
26～30年	69	9	13	51	25	25
31～35年	56	13	8	28	8	22
36～40年	41	6	2	13	8	19
41年以上	28	1	1	6	1	6
合計	848	305	158	925	411	222

Ⅲ. 脳性麻痺発症の主たる原因について

表Ⅲ-1 原因分析報告書において脳性麻痺発症の主たる原因として記載された病態^{注1,2)}

病態		件数	%
原因分析報告書において主たる原因として単一の病態が記されているもの		170	40.6
	常位胎盤早期剥離	54	12.9
	臍帯因子	47	11.2
	臍帯脱出	11	(2.6)
	臍帯脱出以外の臍帯因子 ^{注3)}	36	(8.6)
	感染 ^{注4)}	12	2.9
	児の頭蓋内出血	10	2.4
	母児間輸血症候群	7	1.7
	双胎における血流の不均衡（双胎間輸血症候群を含む）	7	1.7
	胎盤機能不全または胎盤機能の低下 ^{注5)}	7	1.7
	子宮破裂	5	1.2
	その他 ^{注6)}	21	5.0
原因分析報告書において主たる原因として複数の病態が記されているもの^{注7)}		65	15.5
【重複あり】	臍帯脱出以外の臍帯因子 ^{注3)}	31	(7.4)
	胎盤機能不全または胎盤機能の低下 ^{注5)}	15	(3.6)
	感染 ^{注8)}	14	(3.3)
	常位胎盤早期剥離	11	(2.6)
原因分析報告書において主たる原因が明らかではない、または特定困難とされているもの		184	43.9
合計		419	100.0

注1) 本制度は、在胎週数や出生体重等の基準を満たし、重症度が身体障害者障害程度等級1級・2級に相当し、かつ児の先天性要因および新生児期の要因等の除外基準に該当しない場合を補償対象としている。このため、分析対象はすべての脳性麻痺の事例ではない。

注2) 原因分析報告書において脳性麻痺発症の主たる原因として記載された病態を概観するために、胎児および新生児の低酸素・酸血症等の原因を「脳性麻痺発症の主たる原因」として、原因分析報告書の「脳性麻痺発症の原因」をもとに分類し集計している。

注3) 「臍帯脱出以外の臍帯因子」は、臍帯付着部の異常や臍帯の過捻転等の形態異常の所見がある事例や、形態異常等の所見がなくとも物理的な圧迫が推測される事例である。

注4) 「感染」は、子宮内感染やGBS感染、ヘルペス脳炎等である。

注5) 「胎盤機能不全または胎盤機能の低下」は、妊娠高血圧症候群に伴うもの等である。

注6) 「その他」は、児の脳梗塞、児の低血糖症、高カリウム血症、羊水塞栓、児のビリルビン脳症等が含まれる。

注7) 「原因分析報告書において主たる原因として複数の病態が記されているもの」は、2～4つの原因が関与していた事例であり、その原因も様々である。常位胎盤早期剥離や臍帯脱出以外の臍帯因子等代表的なものを件数として示している。

注8) 「感染」は、GBS感染やヘルペス脳炎はなく、絨毛膜羊膜炎や子宮内感染等である。